創作過程に関する一考察

——伴谷晃二作曲「はてしのない風景、オーケストラのために」（一九八七）を中心に——

伴谷晃二

一　はじめに

この小論は、拙作、「はてしのない風景、オーケストラのために」（一九八七、英訳題：Cosmic landscape for orchestra）を中心に、スケッチや作品における音組織上の特徴などを通して、独自の創作過程に関する研究報告をまとめたものである。

一九八五年から一九八七年にかけて作曲したこの作品は、〈オーケストラ・プロジェクト'87〉（一九八七年十二月四日、於、東京・日本青年館大ホール）において、小松一彦指揮、東京フィルハーモニー交響楽団により初演された。[注1][注2]

この作品は、「はてしのない風景、フルートとチェンバロのために」[注3]（一九八五）や「はてしのない風景、クラリネットとピアノのために」[注4]（一九八七）に続く連作であり、点と線の集合や離散がおりなす音群の帯や渦の統合を、一連の多様な面の連鎖として捉え表現している。それは、円環的な多面体であり、無限の時間（カーラ＝Kāla）と宇宙（チャクラ＝Cakra）[注5]の関係を表象するといわれる〝時輪〟[注6]の概念を根底に置き発想されている。

このような発想の起点になったのは、一九八〇年に開催された、「マンダラ＝〔出現と消滅〕展」[注7]（於、東京・西武美術館）において体験した、西チベットの仏教壁画の中のマンダラの図像的構成[注5][注6]であった。中でも、ラダック地方のアルチ寺三層堂に施された金剛界マンダラは、円の周囲に接点をもつ正方形の中に、中尊を中心にして東西南北の方向を基準に整然と配置された三十数体の諸仏が描かれている。また、中尊の大日如来は、正方形の四辺の各中央に施された門標（torana＝鳥居）に囲まれ、各包囲の門標に対して四面相で対応している。さらに、大日如来のみならず、三十数体の諸仏は全て女性の形をしており、赤褐色を基本とした様相で表現されている。このように、中尊を中心軸として同心円上に位置する円と正方形の図像的表現の中に、この作品の原点がある。それは、永遠に続く時間を軸として、それに螺旋上に絡まる渦が円環的に様々な面を示し、それらが離散や集合を繰り返しながら変容を続ける

ことを意図している。

二　スケッチについて

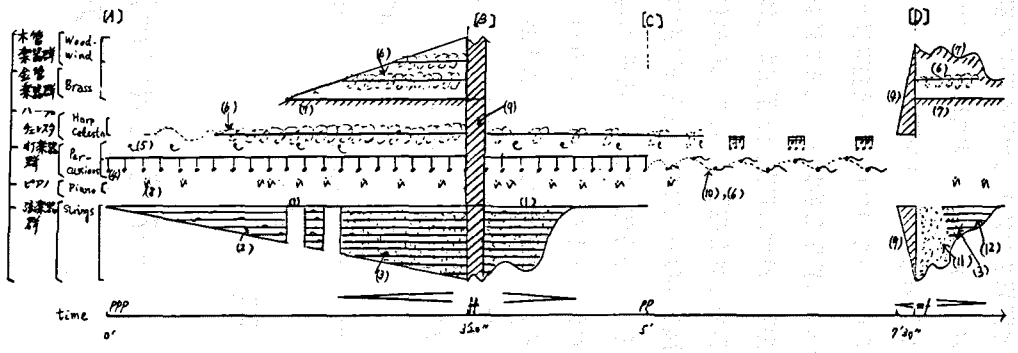
総譜（スコア）が完成する前段階として、設計図の役割を担う独自のスケッチを作成する。それは、横軸に設定した時間の経過につれて、縦軸では、〔A〕から〔J〕の各ブロック毎に変化する音楽の密度やエネルギーの揺れを表している。しかも、大まかに表す第1段階から、それをより詳細に示した第2段階、さらに、各楽器の編成（上から木管楽器群、金管楽器群、ハープ、チェレスタ、打楽器群、ピアノ、弦楽器群）に沿ってその内容を表現した第3段階まで示している。〔図1〕

基本的に二管編成[注8]を中心としたオーケストラに、数種類の特殊な打楽器（例えば、風鈴、キン[注9]、カウベル[注10]など）を加えたこの作品の構成は、〔A〕から〔J〕の十のブロックの連鎖からなっている。また、全体的には、各ブロックが〔F〕を中心として、ほぼ相称的に配列されてもいる。その中で、奇数のブロックは、〔A〕の内容が徐々に変容を続ける一方で、偶数のブロックは、その前後のブロックを繋ぐ移行部や結尾部として捉えられている。

第3段階のスケッチをもとに、各ブロック毎に特徴的な記号及び内容の説明を試みる。

〔A〕ブロック（time≒0'00"〜3'20"）は、弦楽器による高音の持続音[注11]を中心とし、それに弦楽器群による微細な揺れを伴う多層の帯[2]が折り重なっている。そして、弦楽器群の多層の帯が次第に細かい旋律断片による線的な渦[3]に移行して行く。〔図2〕

〔図2〕

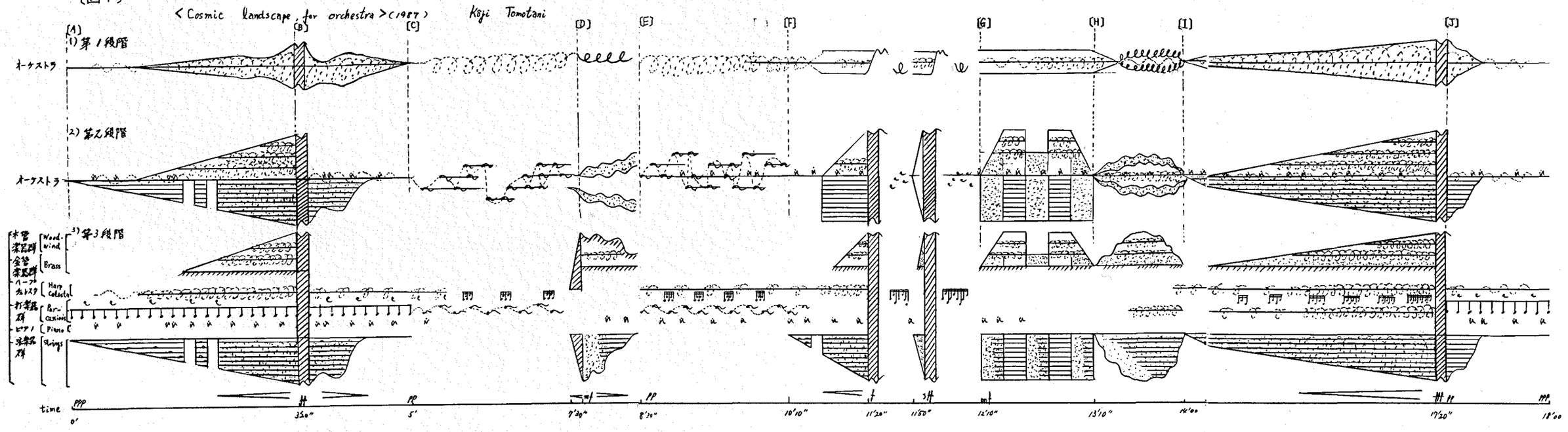


弦楽器群による高音の持続や多層の帯、あるいは線的な渦などを背景にして、打楽器群の中のバス・ドラム（大太鼓）がパルス[注12]を刻む。[4]その間、時折、風鈴が打音によって余韻を伴う点[5]を示している。そして、ハープ、チェレスタ及び木管楽器群などが、全体に点描的な渦[6]を、また、金管楽器群が持続的で線的な帯[7]を表している。さらに、全体に一貫して、ピアノがある音形によって音楽の寸断[8]を行っている。〔図2〕

全楽器群によるカオス状態[9]を経て後、〔B〕ブロック（3'20"〜5'00"）は、〔A〕ブロックの陰影として捉えられ、また、

〔図1〕

〈スケッチ〉


< Cosmic landscape for orchestra > (1987)
Kōji Tomotani
[A]
[B]
[C]
[D]
[E]
[F]
[G]
[H]
[I]
[J]
1) 第1段階
2) 第2段階
3) 第3段階
オーケストラ
オーケストラ
木管楽器群
Wood-wind
金管楽器群
Brass
ハープ
チェレスタ
Harp
Celesta
打楽器群
Per-cussion
ピアノ
Piano
弦楽器群
Strings
time
0'
35.0"
5'
7'30"
8'30"
10'10"
11'20"
11'50"
12'10"
13'10"
14'00
17'20"
18'00

結尾部としても位置づけられている。〔図2〕

〔C〕ブロック（5'00"〜7'30"）では、数々の風鈴[5]やキン[10]などが、打楽器群のみによる点描的な渦[6]を表している。〔図2〕

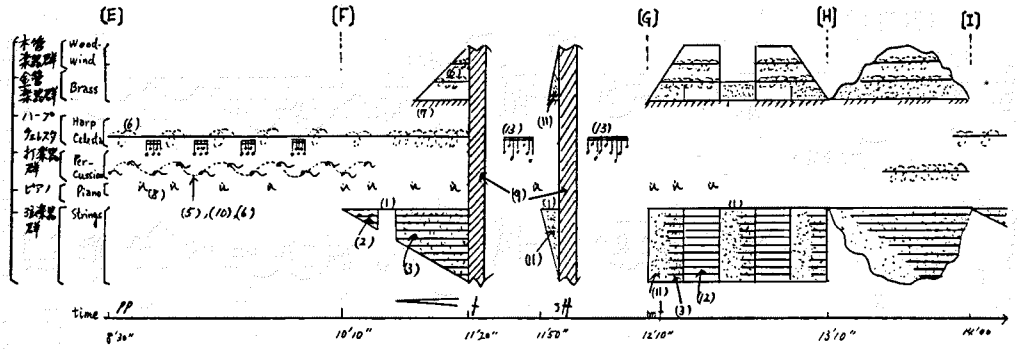
〔D〕ブロック（7'30"〜8'30"）は、〔C〕ブロックと〔E〕ブロックの間に挿入された移行部である。このブロックは、弦楽器群、木管楽器群、及び金管楽器群によるややダイナミックスの小さい瞬間的なカオス状態の中から、弦楽器群の旋律断片による線[11]と線的な渦が、またそれに続いて持続の帯[12]が表れている。また、このブロックの冒頭の小さなカオス状態の後、金管楽器群と木管楽器群の一部による線的な帯が、もう一方の木管楽器群による点描的な渦と共に引き出されている。〔図2〕

〔E〕ブロック（8'30"〜10'10"）では、〔C〕ブロックでの風鈴やキンなどの打楽器群に加えて、鍵盤系打楽器のヴァイブラフォン、それにハープ及びチェレスタが点描的な渦を表している。〔図3〕

〔F〕ブロック（10'10"〜12'10"）では、〔A〕ブロックの内容が断片的に活用されており、次の〔G〕ブロックへの移行部としても位置づけられている。そして、全楽器群の瞬間的なカオス状態による音楽の寸断と、その間合の中でボンゴ[注13]、トムトム[注14]、などの膜質の打楽器による小さなカデンツァ[13][注15]が特徴的に示されている。〔図3〕

〔G〕ブロック（12'10"〜13'10"）では、弦楽器群が旋律断片による線及び線的な渦と持続の帯との交代を前景に、また木管楽器群及び金管楽器群は点描的な渦あるいは線的な渦を背景にして、中心軸である弦楽器群による高音の持続音に絡まっている。〔図3〕

〔図3〕

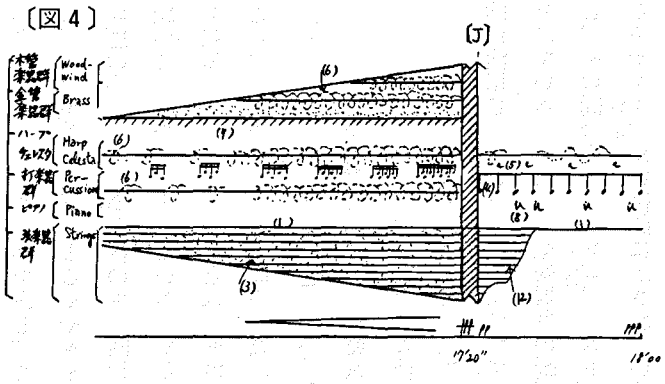


〔H〕ブロック（13'10"〜14'00"）は、〔I〕ブロックへの移行部であり、その中で、弦楽器群及び金管楽器群が共に前景に位置づけられ、旋律断片による線的な渦を表している。〔図3〕

〔I〕ブロック（14'00"〜17'20"）は〔A〕ブロックの内容のヴァリエーションである。全楽器群によるダイナミックスの大きいカオス状態の後、〔J〕ブロック（17'20"〜18'00"）は、〔B〕ブロックと同様に、〔I〕ブロックの陰影として捉えられ、また結尾部としても位置づけられている。〔図4〕

このように、全体の音楽上の設計は、ヴァイオリンによる高音の持続音を中心軸とし、それに折り重なる幾重かの弦楽器群による持続音の帯、そして、そ

〔図４〕



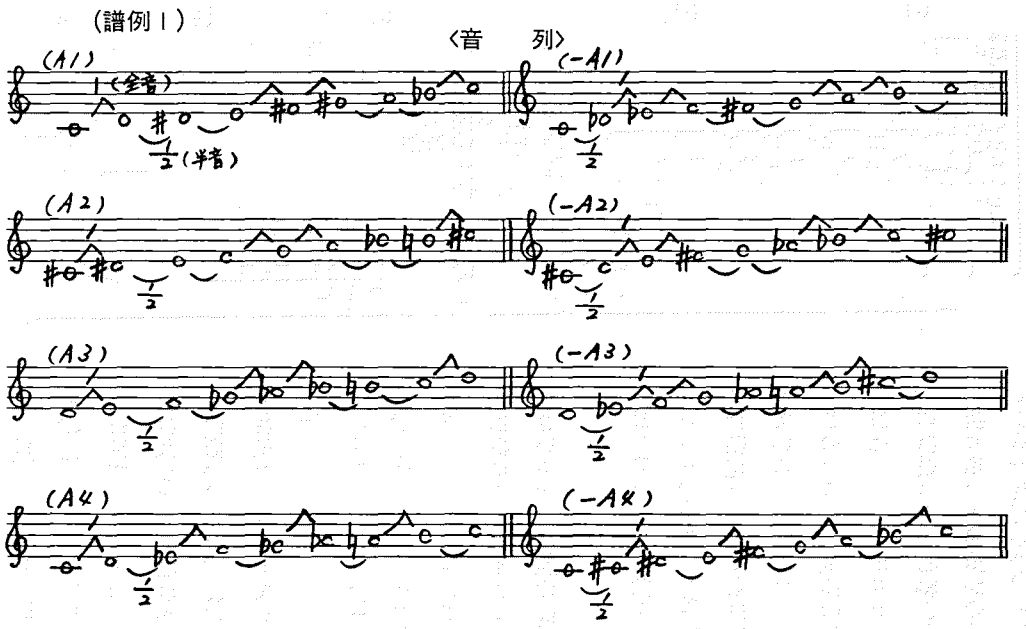
れらに絡まる管楽器群やハープ、及びチェレスタなどによる点や線の渦、さらに、打楽器群を中心とした渦の波紋、ピアノによる音楽の寸断などが織りなす様々な面の連鎖を表現することが意図されている。

三　音組織及び特徴的な音形について

各ブロックの背景に位置づけられた、中心的な音組織及び特徴的な音形などについて触れる。

〔A〕ブロックでは、第一ヴァイオリンのハーモニックス（倍音）による高音（3点E音）を中心軸とし、その背景には、〈A１〉及び〈−A１〉の音列（譜例１）を同時に組み合わせて、弦楽器群による多重音の集積を多層の帯（譜例２）として

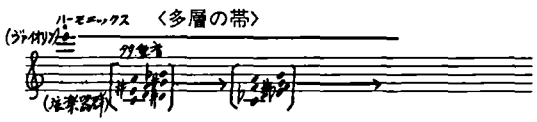
（譜例１）



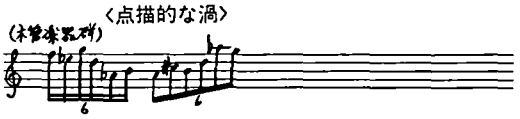
位置づけている。一方前景には、ハープ、チェレスタ及び木管楽器群が、〈−A3〉の音列（譜例1）を用いて点描的な渦（譜例3）を表している。また、金管楽器群は〈A4〉の音列（譜例1）をもとに、持続的で線的な帯（譜例4）を示している。さらにピアノは、〈A3〉の音列（譜例1）をもとにした音群により、作品全体にわたって、一貫して一定の音形を反復し、音楽の寸断（譜例5）を表現している。

〔B〕ブロックは、〔A〕ブロックにおける各楽器群の音列を伴った最後のカオス状態に続いて、その陰影を、〈−A2〉の音列（譜例1）を用いて、この結尾部に表している。

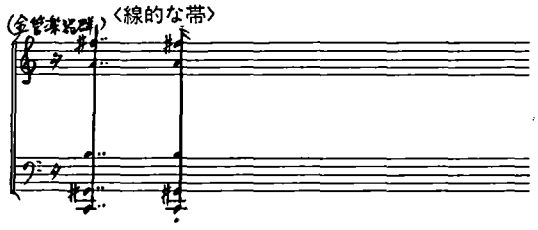
（譜例2）
〈多層の帯〉



（譜例3）
〈点描的な渦〉



（譜例4）
〈線的な帯〉



（譜例5）
〈音楽の寸断〉

〔C〕ブロックは、数々の風鈴やキン、カウベルなど、ピッチの不安定な相対的音高による金属質の打楽器群のみで展開されている。従って、〔A〕ブロックに織り込まれている音列とは関係のない、相対的音高による打楽器ばかりのアンサンブルの内容が示されている。

〔D〕ブロックは、〔F〕及び〔H〕の各ブロックと同様に移行部の役割を担い、他の二つのブロックと共に、基本的に〈A3〉の音列を共有している。また、冒頭のカオス状態は、〔B〕ブロックの冒頭と同様の、〈A1〉及び〈−A1〉、そして〈A3〉及び〈A4〉の音列を用いている。その瞬間的なカオス状態の中から、徐々に、〈A3〉から〈−A3〉の音列に移行する弦楽器群、及び〈A3〉と〈−A3〉の音列を同時に展開している木管楽器群と金管楽器が引き出されている。

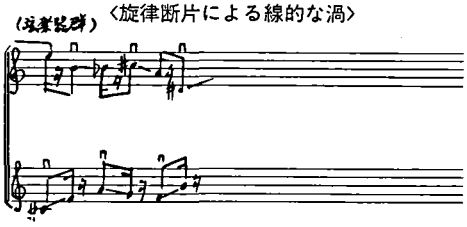
〔E〕ブロックは、相対的音高による打楽器群に加えて、ヴァイブラフォン、ハープ、それにチェレスタが〈−A3〉の音列によって点描的な渦を表している。

〔F〕ブロックでは、〔A〕ブロックの内容を断片的に活用していることに伴って、〈A1〉及び〈−A1〉、そして〈−A3〉及び〈A4〉の音列が、〔A〕ブロックと同様に同時に組み合わされている。一方、〔D〕や〔H〕のブロックと共に移行部であるこのブロックは、ハープやチェレスタ、及び、全体に一貫して音楽を寸断するピアノの音形の中に、このブロックの中心である〈A3〉の音列が位置づけられている。

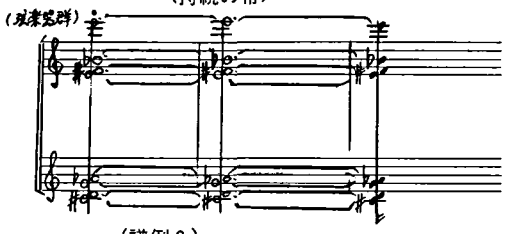
〔G〕ブロックでは、弦楽器群が、〈A2〉の音列（譜例1）を中心とした旋律断片による線的な渦（譜例6）と、〈−A2〉のそれを中心

とした持続の帯（譜例７）との交代を行なっている。一方、木管楽器群及び金管楽器群は、〈Ａ４〉及び〈−Ａ４〉の音列（譜例１）を中心とした点描的な渦あるいは線的な渦を背景にして、弦楽器群に絡まっている。

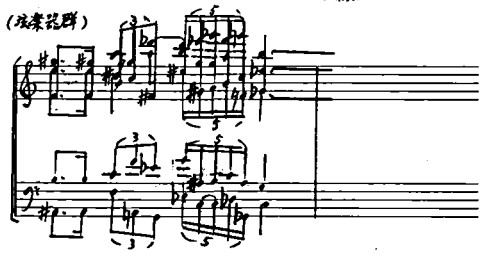
（譜例６）
〈旋律断片による線的な渦〉



（譜例７）
〈持続の帯〉



（譜例８）
〈旋律断片による線〉



〔Ｈ〕ブロックは、〔Ｄ〕及び〔Ｆ〕ブロックと共に基本的に〈Ａ３〉の音列を共有しており、弦楽器群は木管楽器群と共に、その音列によって旋律断片による線的な渦を表している。

〔Ｉ〕ブロックは、〔Ａ〕ブロックのヴァリエーションである。ここでは、〈Ａ１〉及び〈−Ａ１〉、そして〈−Ａ３〉及び〈Ａ４〉の音列を中心としており、弦楽器群や木管楽器群、金管楽器群に対して、これらの音列が数種類に分断されながら多重化され示されている。

〔Ａ〕ブロックに対応する〔Ｂ〕ブロックと同様に、〔Ｊ〕ブロックは、各音列の折り重なった冒頭のカオス状態に続いて、〔Ｉ〕ブロックの陰影を、〈−Ａ２〉の音列を中心として結尾部に位置づけている。

曲全体に配分された各ブロックの中心的な音列は、〔Ａ〕ブロックの〈Ａ１〉、〈−Ａ１〉、〈−Ａ３〉、〈Ａ４〉、〔Ｂ〕ブロックの〈−Ａ２〉、〔Ｄ〕ブロックの〈Ａ３〉、〔Ｅ〕ブロックの〈−Ａ３〉、〔Ｆ〕ブロックの〈Ａ３〉（〈Ａ３〉を中心としながらも、〈Ａ１〉、〈−Ａ１〉、〈−Ａ３〉、〈Ａ４〉が断片的に分散されている）、〔Ｇ〕ブロックの〈Ａ１〉、〈−Ａ１〉、〈−Ａ３〉、〈Ａ４〉、〔Ｈ〕ブロックの〈Ａ３〉、〔Ｉ〕ブロックの〈Ａ１〉、〈−Ａ１〉、〈−Ａ３〉、〈Ａ４〉、〔Ｊ〕ブロックの〈−Ａ２〉である。しかし、〔Ｃ〕ブロックは、相対的音高による打楽器群が用いられており、音列と無関係のため省略する。従って、〔Ａ〕と結尾部〔Ｂ〕に対して〔Ｉ〕と結尾部〔Ｊ〕、また移行部〔Ｄ〕に対して同様の〔Ｈ〕というように、中心的な音列の上からも、移行部〔Ｆ〕を中心とした各ブロック間の均衡がとられている。

このように、各ブロックの中心的な音組織は、背景にあるいくつかの音列と重なり合いながら共通音を伴って、多層の帯や点描的な渦、そして線的な帯などを描き出している。その際、数種の重複し合う音列は、断片的に分散したり、また集積を繰り返したりもする。

四　音楽上の特色について

スケッチや音組織、そして特徴的な音形などに続いて、各ブロック毎の音楽上の特色について触れる。

〔A〕ブロックは、第一ヴァイオリンのごく弱奏によるハーモニックスの持続音[1](注11)に始まり、微分音程(注16)による小さな揺れを伴いながら、数声部に分割された弦楽器群が、高声部から低声部に向けて徐々に積み重ねられて多層の帯[2]を表して行く。（譜例9）

一方、冒頭より、バス・ドラムによる鼓動に類似したパルスの刻み[4]や、時折示される風鈴による打音[5]とその余韻、そして全体に一貫して示される、音楽を寸断するピアノの音形[8]などが、静寂の中で多層の帯による音空間を背景に緊張感を表している。その後、弦楽器群は旋律断片による線的な渦[3]に移行し、木管楽器群や打楽器群による点描的な渦[6]、及び金管楽器群による線的な帯[7]を伴いながら次第にカオス状態[9]に至る。（譜例10）

〔B〕ブロックでは、冒頭のカオス状態[9]の中から引き出された、第一ヴァイオリンのハーモニックスによる高音の持続音[1]を中心軸とし、その背景には、弦楽器群のグリッサンド(注17)による、徐々にゆっくりと移動する多層の帯[2]が位置づけられている。また、バス・ドラムによるパルスの刻み[4]や、ヴァイブラフォンやハープ、チェレスタによる点描的な渦[6]がそれに絡まりながら、次第に閑寂な空間へと移行する。その結果、〔B〕ブロックの冒頭のカオス状態[9]に向かって徐々に増大するエネルギーと、その後、次第に減少するエネルギーの有様は、〔A〕ブロックの陰影を鮮明に表現している。（譜例11）

〔C〕ブロックは、4人の打楽器奏者による打楽器アンサンブルの部分である。ここで使用される楽器は、タムタム(注15)(注18)、スレーベル[16]、数個の風鈴[5]、数種のキン[10]、数個のカウベル[17]、ミュートされた2個のカウベル[18]、サスペンディド・シンバル(注19)(注20)など、ピッチの不安定な相対的音高による金属質のものばかりで統一されている。それらは、糸巻やゴム巻きなどの数種の持ち換えられた撥による打音のみならず、スーパーボールや弦楽器の弓でこする摩擦音などによって、金属質のみならず木質や膜質、あるいはグラス質の音色まで表現する。このように数種の音色を組み合わせることによって、オーケストラのみの場合とは異なる特殊な音空間を描出することができる。このような金属質の打楽器群による異質な音空間は、他のブロックにあっても、オーケストラとの強調や対立を繰り返しながら位置づけられている。（譜例12）

〔D〕ブロックは、瞬間的なカオス状態[9]から開始されるが、それは、〔C〕ブロックにおける打楽器アンサンブルの内容と、〔E〕ブロックの冒頭の打楽器アンサンブルに、ヴァイブラフォン及びチェレスタを加えた点描的内容とを分断する役割を担っている。（譜例13）

〔E〕ブロックは、〔C〕ブロックで示された数個のキン[10]や数種のカウベル[17]、ミュートされた2個のカウベル[18]やサスペンディド・シンバル[19]などによる点描的な渦[6]に加えて、ヴァイブラフォンによる線的な帯[7]とチェレスタによる点描的な渦[6]、及びピアノの音形による音楽の寸断[8]が添えられている。このブロックは、波紋のように拡大される、金属質の打楽器群による異質な音空間に対して、もう一方の金属質の鍵盤系打楽器であるヴァイブラフォンとチェレスタが、それに対立あるいは強調することがねらいである。（譜例14）

〔F〕ブロックは、全体の設計上、全ブロックの中心に位置づけられており、その内容は、〔A〕ブロックのヴァリエーションでもある。このブロックの冒頭は、〔E〕ブロックでの打楽器群の音空間を包含するかのように、ハーモニックスを中心とした弦楽器群による多層の帯[2]が打楽器群の点描的な渦[6]を背景で支えている。（譜例15）

右記の内容に引き続いて、弦楽器群の旋律断片による線的な渦[3]や、木管楽器群及び打楽器群による点描的な渦[6]、そして金管楽器群による線的な帯[7]などが同時に展開されながら、前景に位置づけられている。それらは、次第にエネルギーを増大し、瞬間的なカオス状態[9]に至る。その後、このブロックの特徴でもあるが、ボンゴ、トムトム、ウッド・ブロック[注21]などの打楽器群によるきわめて短いカデンツァ[13]と、瞬間的なカオス状態を繰り返した後、〔G〕ブロックに至る。（譜例16）

〔G〕ブロックは、第一ヴァイオリンのハーモニックスによる高音の持続音[1]を中心軸としながら、弦楽器群は小さなポルタメント[21][注22]を多彩に組み合わせた部分と、その後に続く持続の帯[12]との数回にわたる交代によって成り立っている。その間、金管楽器群による線的な帯[7]は、弦楽器群のポルタメントを伴う、旋律断片による線的な渦[3]と対応している。一方、木管楽器群による点描的な渦[6]は、弦楽器群の持続の帯とも対応している。このような関係の中で、ピアノの特徴的な音形が音楽の寸断[8]を行なっている。（譜例17）

〔H〕ブロックは、自由なリズムによって7秒間程ピッチカート[22][注23]で奏するように指示された、弦楽器群の点描的なカオス状態[9]に始まり、その後、金管楽器群の小さな旋律断片による線的な帯[7]に移行する。その際、木管楽器群は点描的な渦[6]を示し、移行的なこのブロックの背景に位置している。（譜例18）

〔I〕ブロックは、ハープ、ピアノ、ヴァイブラフォン（後にシロフォンに持ち換え）で開始され、徐々に全楽器群によるカオス状態[9]に至る。（譜例19）

その際、ハープ、ピアノ、ヴァイブラフォンは、このブロックの中心として位置づけられている。また、多彩なグリッサンド[14]を伴う弦楽器群による多重音が多層の帯[2]として、一方、木管楽器群及び金管楽器群は、

点描的な渦[6]あるいは線的な渦[3]として背景に位置し、それらに絡まっている。

このように、各楽器群の特徴的な様相が折り重なり、次第に最大の強奏を伴いながらカオス状態に達する。（譜例20）

〔J〕ブロックは、〔A〕ブロックに対応する〔B〕ブロックと同様に、〔I〕ブロックの結尾的役割を担っているが、連鎖された全ブロックの最後の結尾部としても重要な位置づけがなされている。ここでは、バス・ドラムによるパルスの刻み[4]や時折打音される風鈴[5]、それにスーパーボールによるタムタム[15]の摩擦音などが、中心軸としての第一ヴァイオリンのハーモニックスによる高音の持続音[1]の背景に位置している。一方、ハープ、チェレスタが点描的な渦[6]による音形を断片的に表し、ピアノはその中で、常時鋭く音楽の寸断[8]を示し続けている。（譜例21）

五　おわりに

これまで、拙作、「はてしのない風景、オーケストラのために」の創作上の原点やスケッチ、そして作曲上の計画やその具体的な音組織及び音楽上の特色などを通して、その創作過程を辿った。

西チベットの仏教壁画、殊に、アルチ寺三層堂における金剛界マンダラの図像的構成は、単に同心円上の円と正方形の関係のみならず、その関連の中に多種多様な点と線を位置づけている。このことは、大日如来を中心軸とする、パトス的なものとロゴス的なものや、大宇宙的なものと小宇宙的なもの、あるいは、方位を基準とした相称的な諸面など、諸々の様相が対峙しつつ、一方で相補し合うという、諸相が様々な状況の中で、同時に関係づけられた〝統合の場〟として理解することができる。

その結果、作曲上では、時間の経緯に沿って〝流動する構造〟をもつ作品として位置づける一方で、円錘体に渦を巻く〝円環的な構造〟としても捉えている。しかも、そのことは、恒常的に渦を巻く巨視的で〝円環的な構造〟の中に、大小様々なレベルの微視的な渦が内包されていることも意味している。

このような創作上の意図は、高音の持続音を中心軸とし、それに絡まる旋律断片による点描的な渦や線的な渦、あるいは線的な帯など、様々な点と線の集合や離散が織りなす、まさに、音群の帯や渦の〝統合〟として反映している。しかも、〔A〕ブロックから〔F〕に向けて、またその後、〔F〕ブロックから〔J〕ブロックに向けて構築された様相は、〔F〕ブロックを中心的な面として共有し、同時に2つの逆方向の円錘体が接点をもつものとして捉えてもいる。そして、〔A〕から〔J〕にかけての各ブロックは、一連の多様な面の連鎖として位置づけているが、そのことは、単に、ほぼ相称的に配置されているということではなく、むしろ、〔A〕から〔J〕へ、そして再び〔J〕から〔A〕へといった循環性をも示している。その意味で、このようなブロックの連鎖を、終わりのない〝円環的な多面体〟として捉え意図している。

また、この作品には、基本的な二管編成のオーケストラに加えて、ピッチの不安定な特殊な打楽器が数多く使用されている。それらは、ブロッ

クの内容によっては、オーケストラの中で単一に用いられ、またあるブロックでは、特殊な打楽器ばかりのアンサンブルが提示されるなど、この作品の中での打楽器群の位置づけはきわめて重要である。

ここで、この作品の〈オーケストレーション〉表を通して、基本的な二管編成のオーケストラのほか、四人の打楽器奏者によって数十種類の打楽器、及びそれに伴う数種類の撥などが使用されていることを参考までに示しておく。〈表〉

以上、独自の創作過程に関する研究報告を終えるに際し、作曲の創作過程は様々であり、決して一様ではないことを付言しておく。このことは、作曲家各自が現代の生きたことばを模索し、現代芸術の歴史的、社会的役割と位置づけについて、常に検討し続ける個々の姿勢があることを意味している。そして、その結果創造される諸作品は、多種多様の創作の道筋を経て後に徐々に位置づく、生きたあるいは生かされたメッセージであるかもしれない。

〈オーケストレーション〉表
Orchestration

(木管楽器群)

2 Flutes (1 Piccolo;持ち換え)
2 0boes
2 Clarinets in Bb (1 Bass Clarinet in Bb;持ち換え)
2 Bassons (1 Double-Basson;持ち換え)

(金管楽器群)

4 Horns in F
2 Trumpets in C
2 Trombones
1 Tuba

(打楽器群)

4 Percussions
1) 2 Bongos, 3 Tom-Toms(L・M・S)
2 Sleigh bells, 1 Tam-Tam(ヴァイオリンの弓, スーパーボール、トライアングルの撥などを使用)
2) 1 Bass Drum, 2 Maracas, 5 Wood-Blocks, 1 Fouet(Whip), 1 Musical saw(ヴァイオリンの弓を使用)
3) 1 Vibraphone(without motor), 1 Xylophone, Claves(1対)
4) 5 Bras wind bells(風鈴;Ⓐ～Ⓔ…heigh→low), 5 Temple bells(磬;Ⓐ～Ⓔ…heigh→low), 1 Bras wind chim, 7 Cow bells (Ⓐ～Ⓒ…heigh→low;Ⓓ～Ⓖはcoperto)
2 Cymbales suspended(Ⓐ～Ⓑ,heigh→low)

1 Celesta
1 Harp
1 Piano

(弦楽器群)

Strings

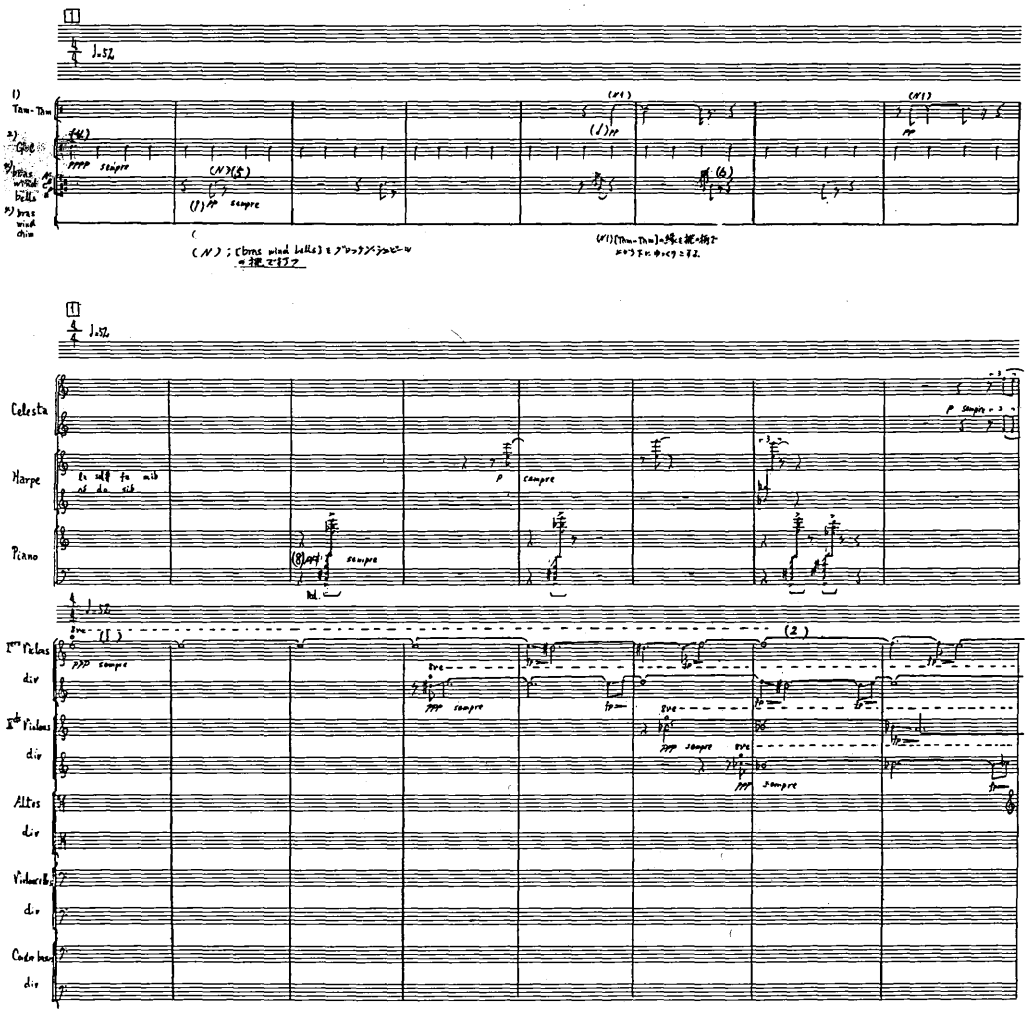
〈打楽器の撥及びその他の指示〉

コード巻
ゴム巻
マリンバ用
グロッケン・シュピール用
ザイロフォンスティック
スーパーボール
トライアングルの撥
撥の柄
ヴァイオリンの弓

Cosmic landscape for orchestra (1987)　Kōji Tomotani

（譜例９）

〔A〕



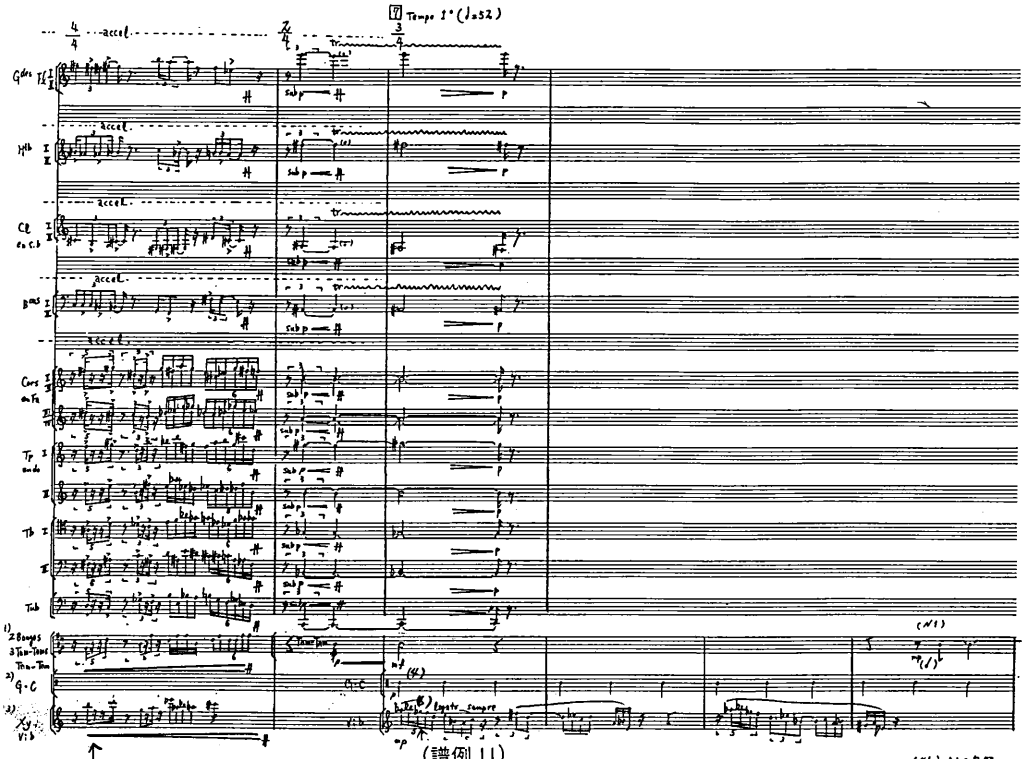
（譜例 10）

〔A〕

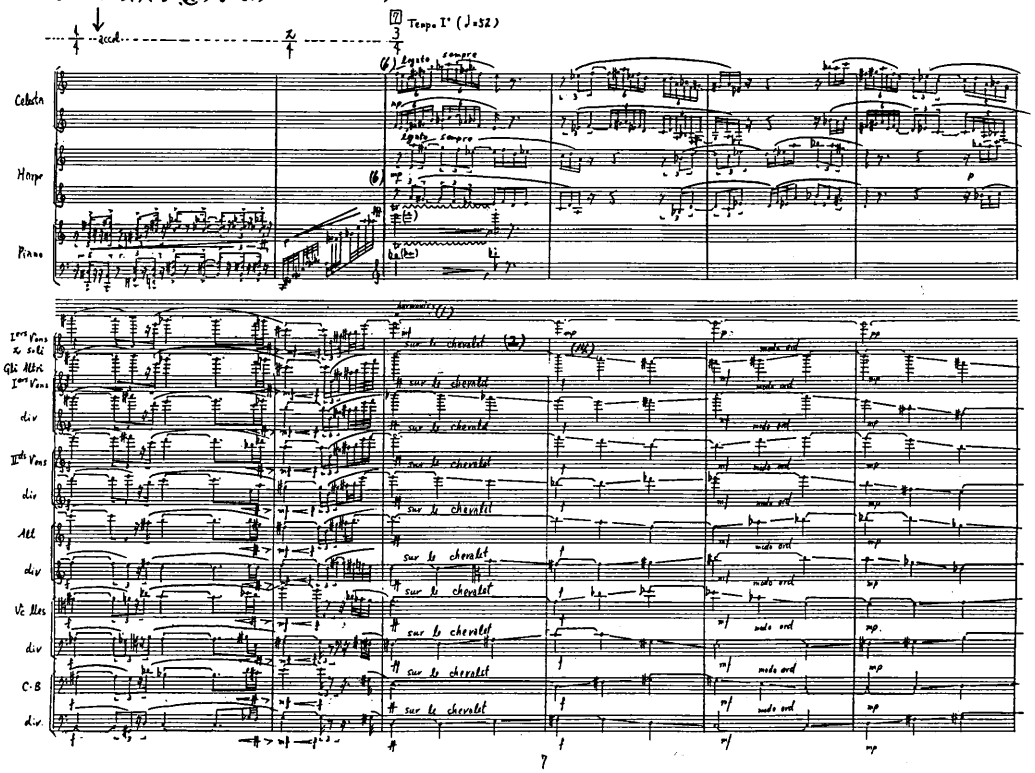
（譜例 10）

〔A〕 <カオス状態>（9）

〔B〕 （譜例 11）

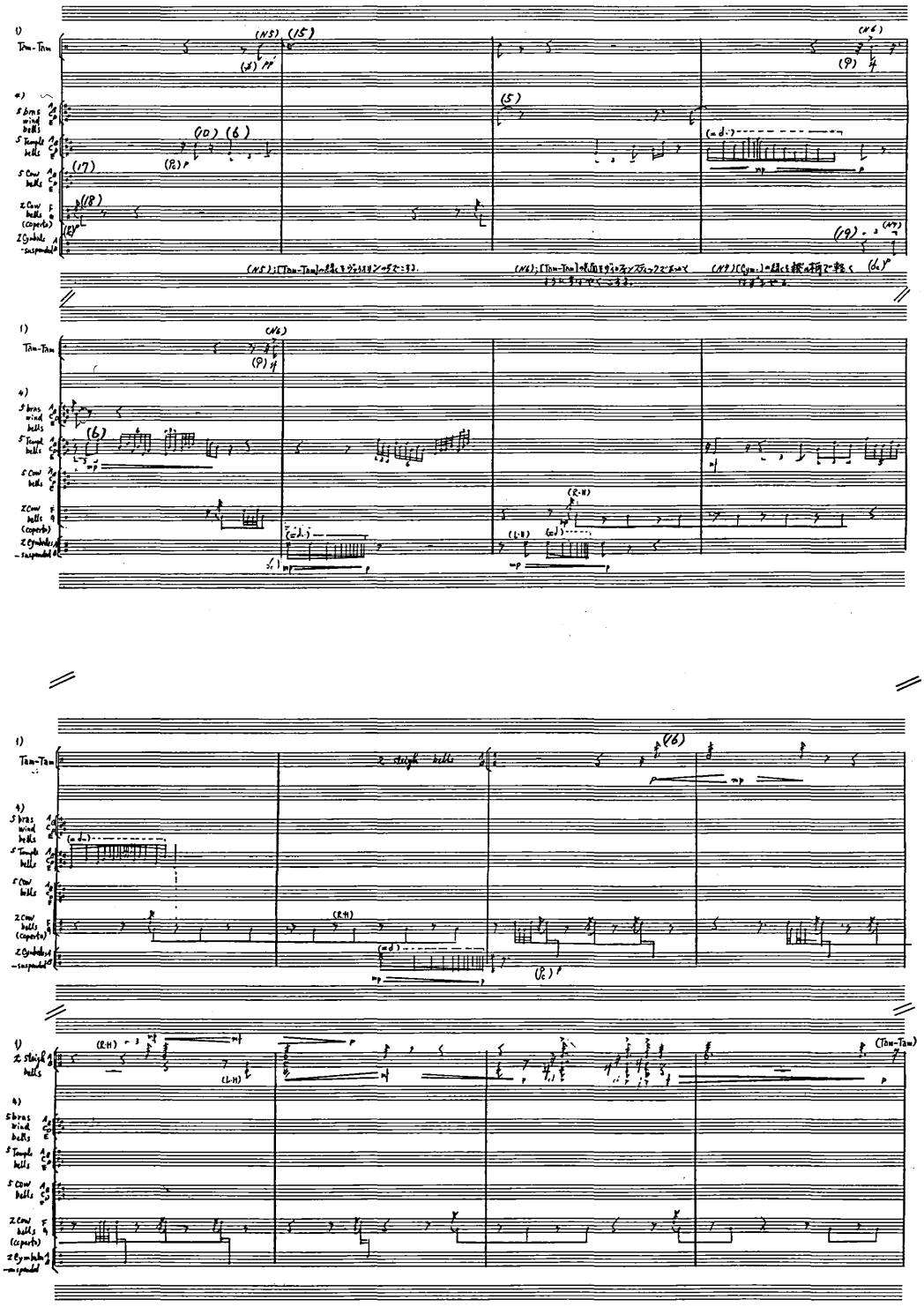

accel.
Tempo I° (♩=52)
Cor en Fa
Tr en ut
Tb
Tub
2 Bongos
3 Tam-Tams
Tam-Tam
Q.C
Xy
Vib

〔B〕 （譜例 11）


〈カオス状態〉γ (9)
accel.
Tempo I° (♩=52)
Celesta
Harpe
Piano
sur le chevalet
C.B

(譜例 12)

〔C〕


Tam-Tam
5 brass wind bells
5 Temple bells
5 Cow bells
2 Cow bells (capotes)
2 Cymbals -suspended
2 staight bells

〔D〕 (譜例 13)

poco accel. ♩=72

Cl. en si♭

Cors en Fa

Tp en do

Tb

Tub

poco accel.

1) Tam-Tam (Baqueta de Tim.)

2) Sw-B

Gu-S

↑ (譜例 13)

〔D〕 ←カオス状態>(9)- - - - →

poco accel. ♩=72

Harpe

Piano

poco accel. ♩=72

Ier pupitre

IIe pupitre

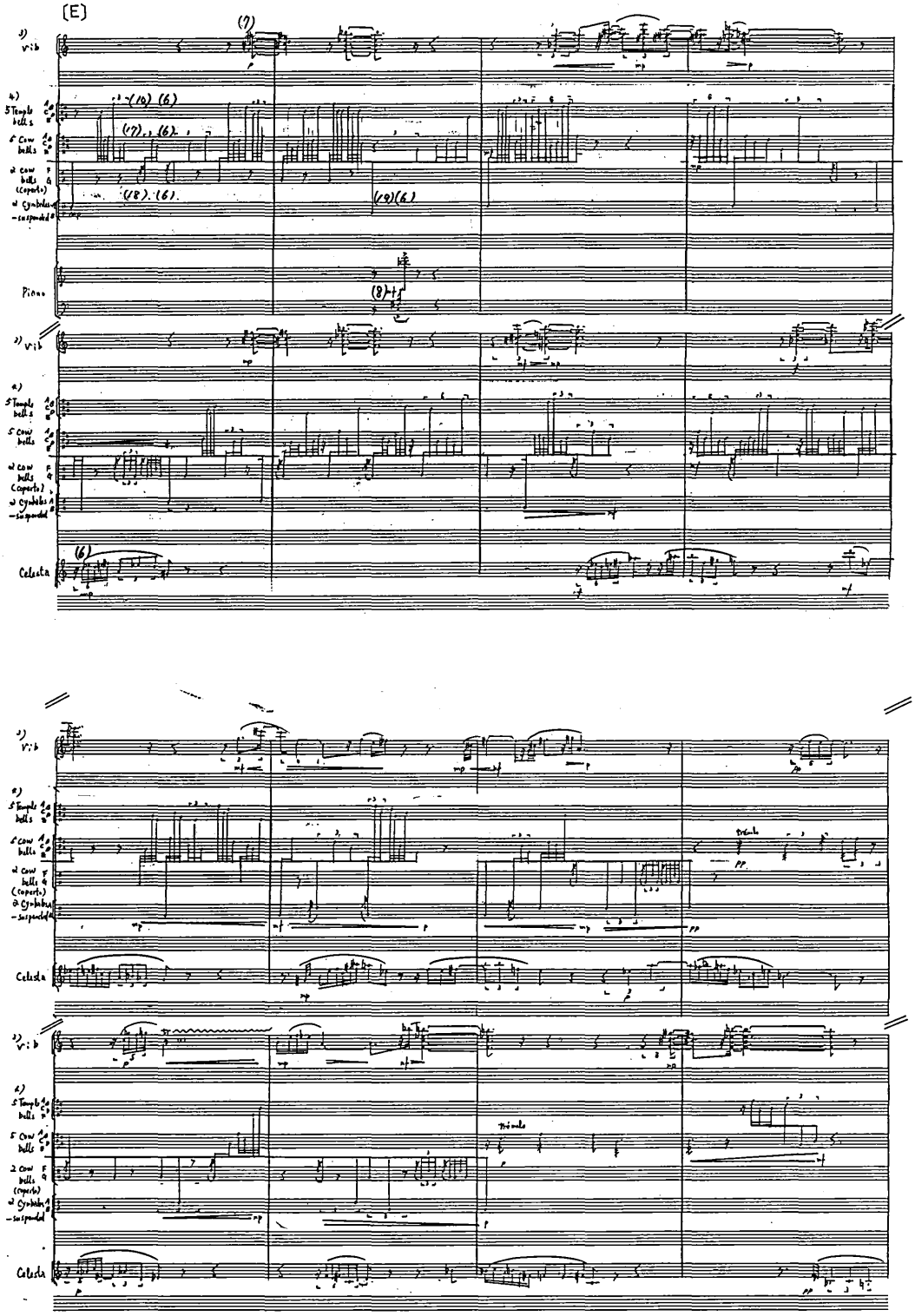
Altos

Vcelles

C-B

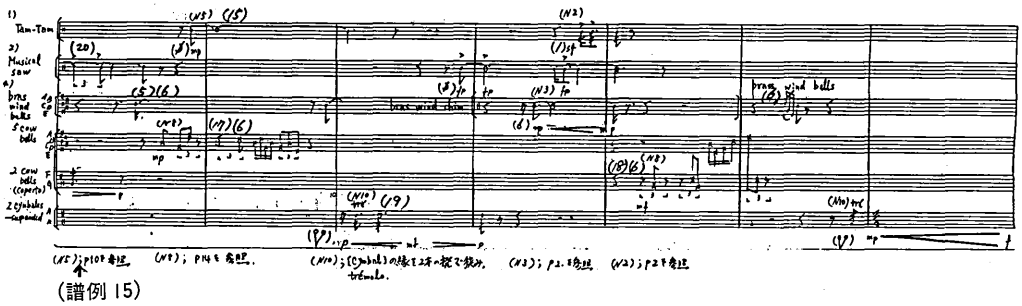
(譜例 14)

〔E〕


Vib
5 Temple bells
5 Cow bells
2 cow bells (cowbells)
2 Cymbals -suspended
Piano
Celesta
Triangle

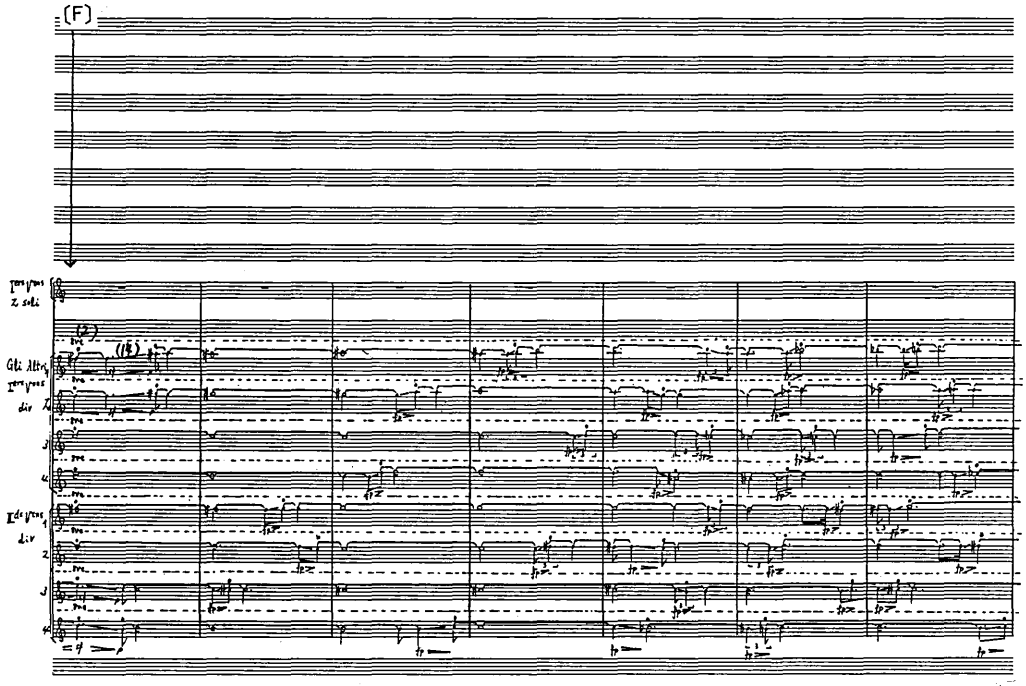
(譜例 15)

〔F〕

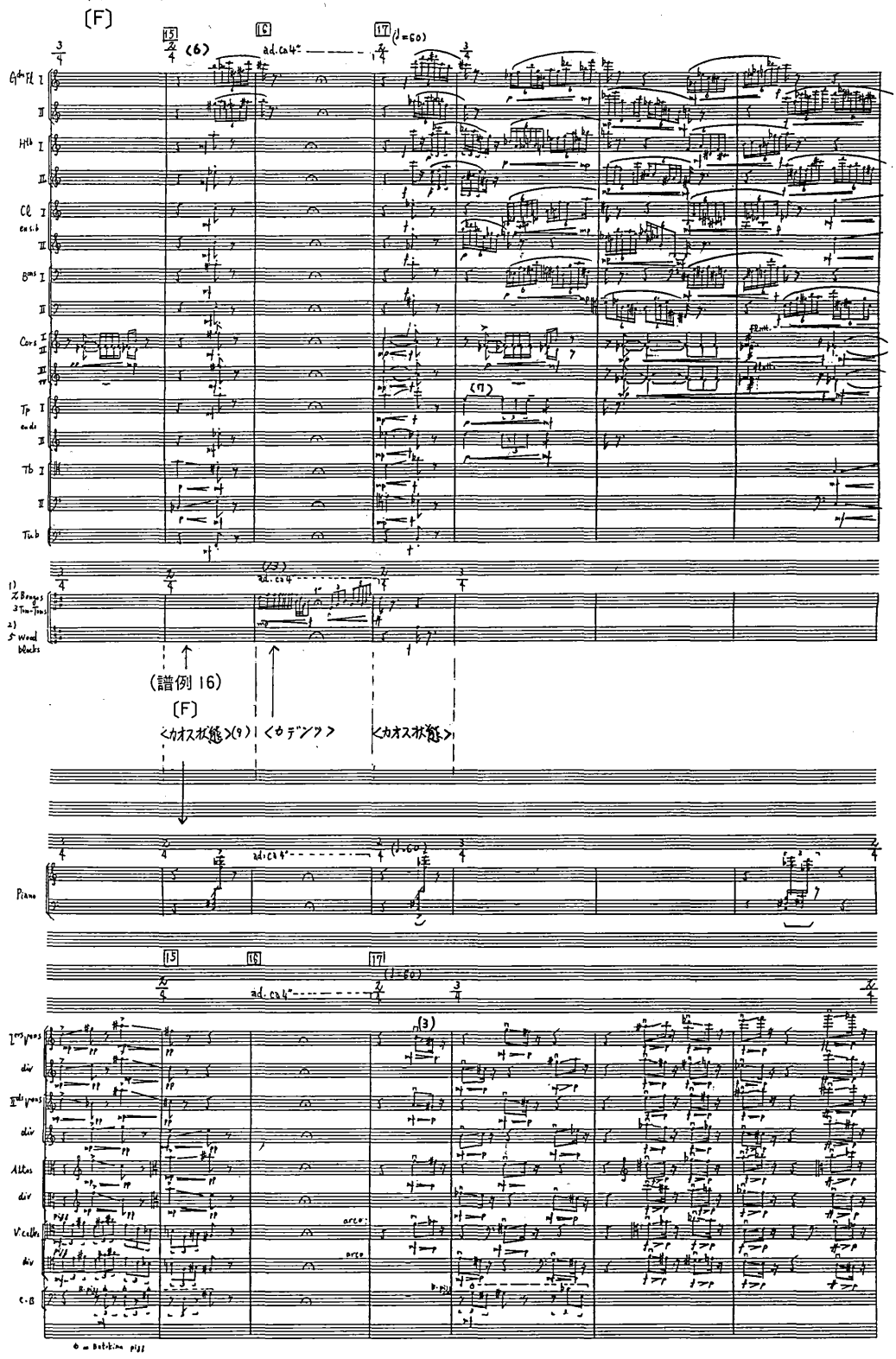

1) Tam-Tam
2) Musical saw
4) brass wind bells
5 cow bells
2 cow bells (open)
2 cymbals suspended
bass wind chime
brass wind bells
(N1); p102 参照.
(N2); P14 参照.
(N10); (Cymbal) の縁を2本のバチで擦り、tremolo.
(N3); p2. 3参照
(N2); p2 4参照

(譜例 15)

〔F〕

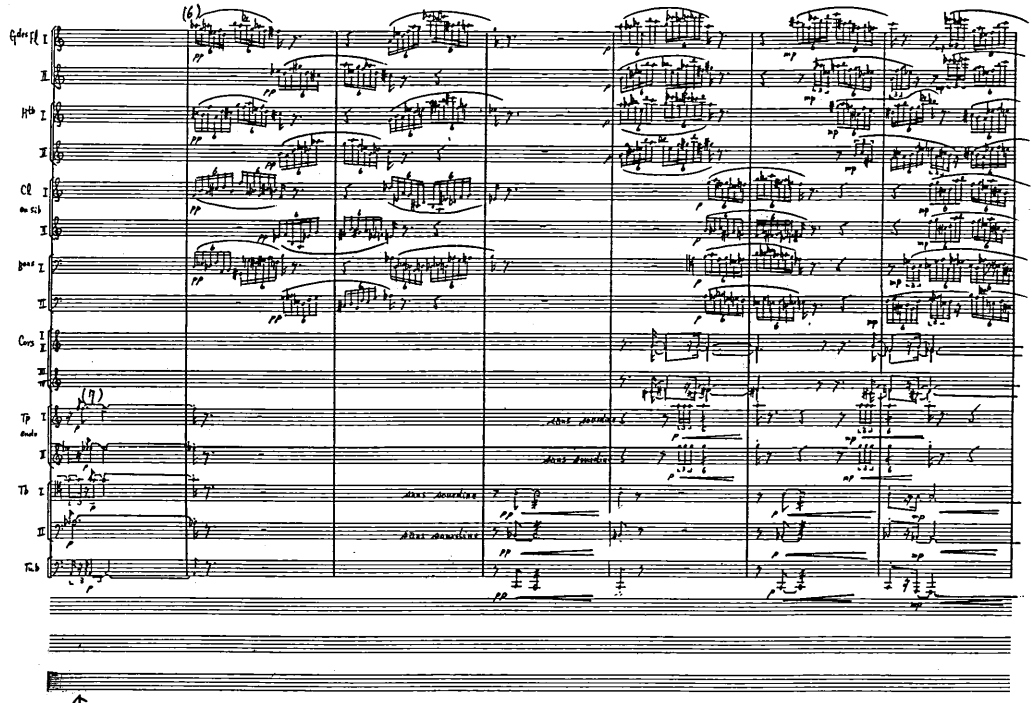

Ten/pos 2 soli
Gli Alto
Ten/pos div
Ten/pos div

(譜例 16)
〔F〕


15
16
17
ad.ca4"
(♩=60)
(6)
(7)
(3)
Fl.ut.
Piano
Vcelle
arco
(譜例 16)
〔F〕
<カオスオ態>(9)
<カデンツ>
<カオスオ態>

（譜例 17）

〔G〕

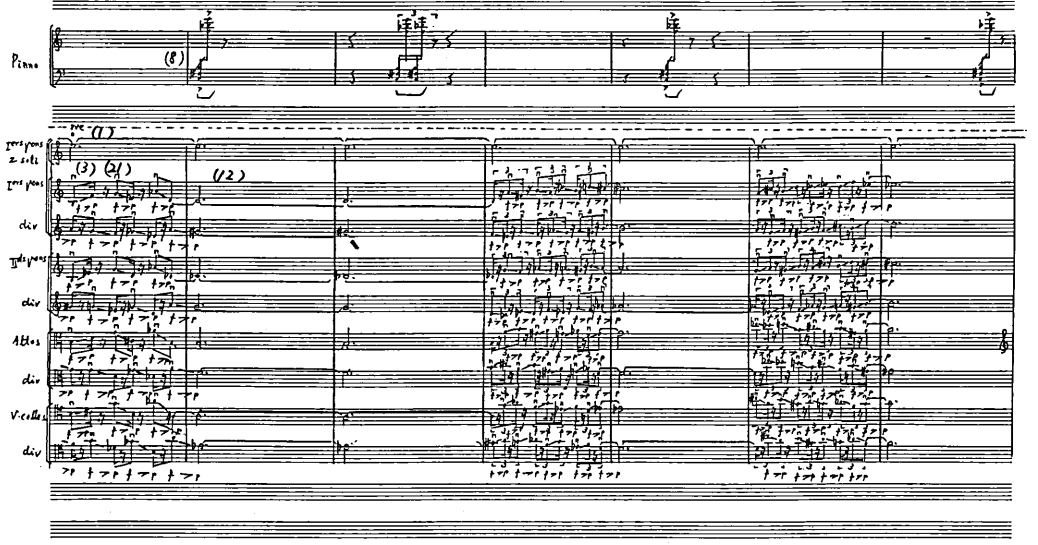


↑

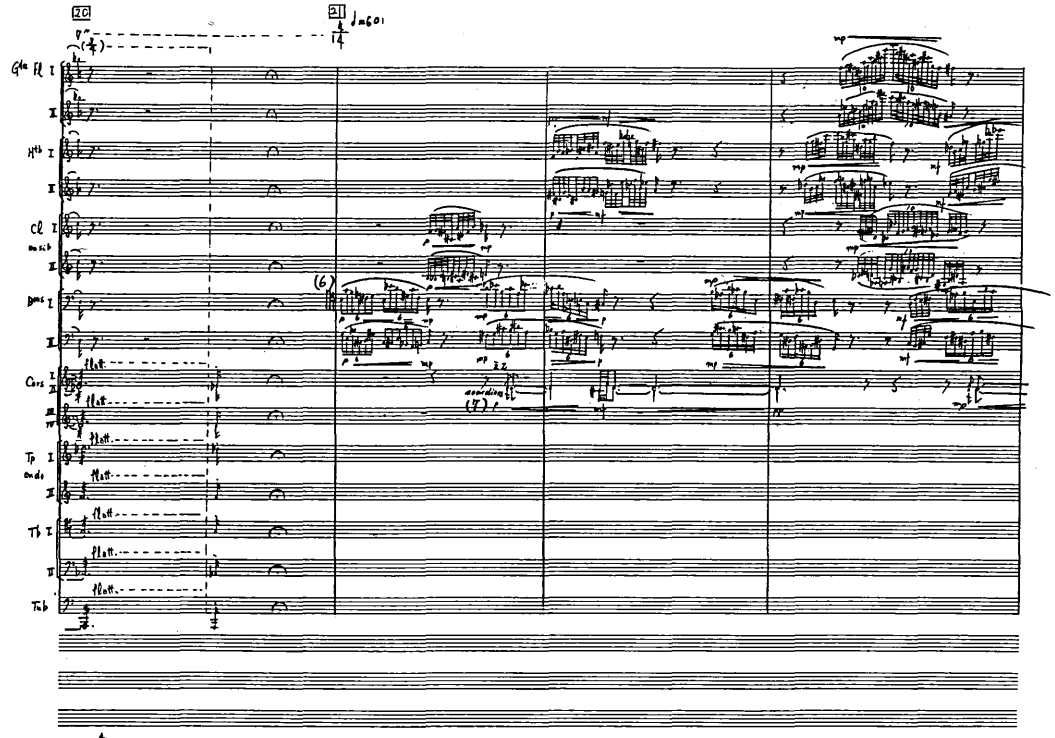
（譜例 17）

〔G〕

↓

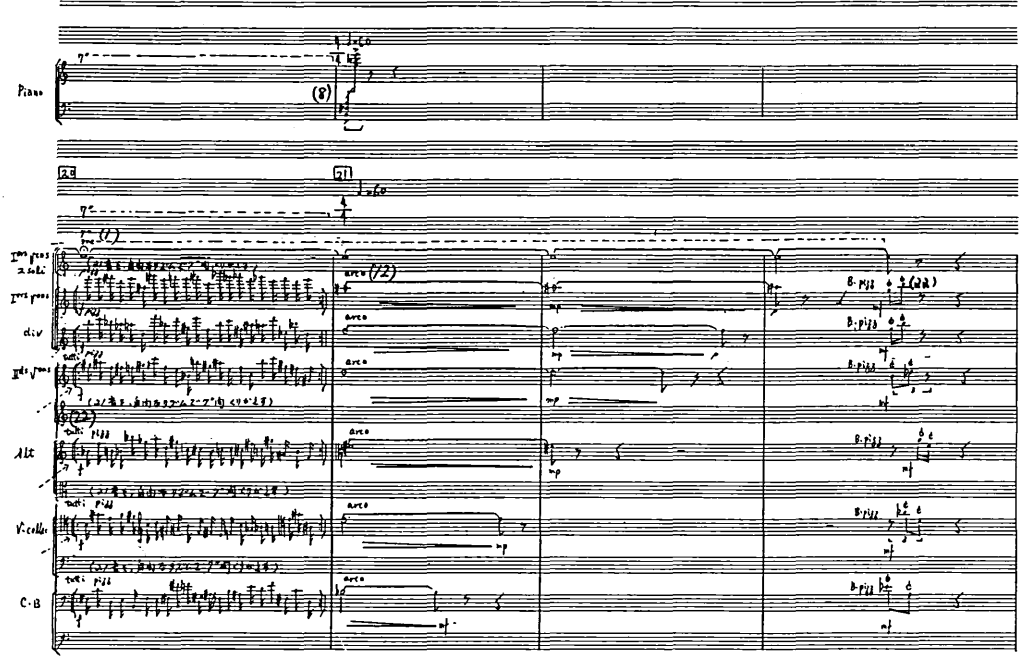


〔H〕 （譜例 18）



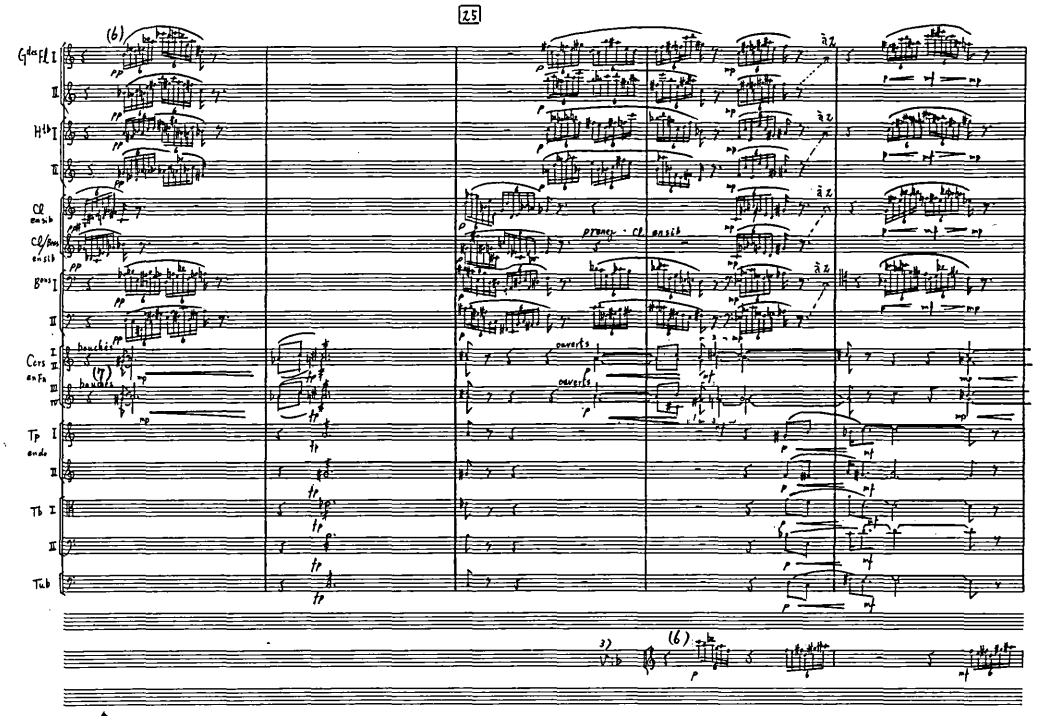
（譜例 18）

〔H〕



（譜例 19）

〔1〕

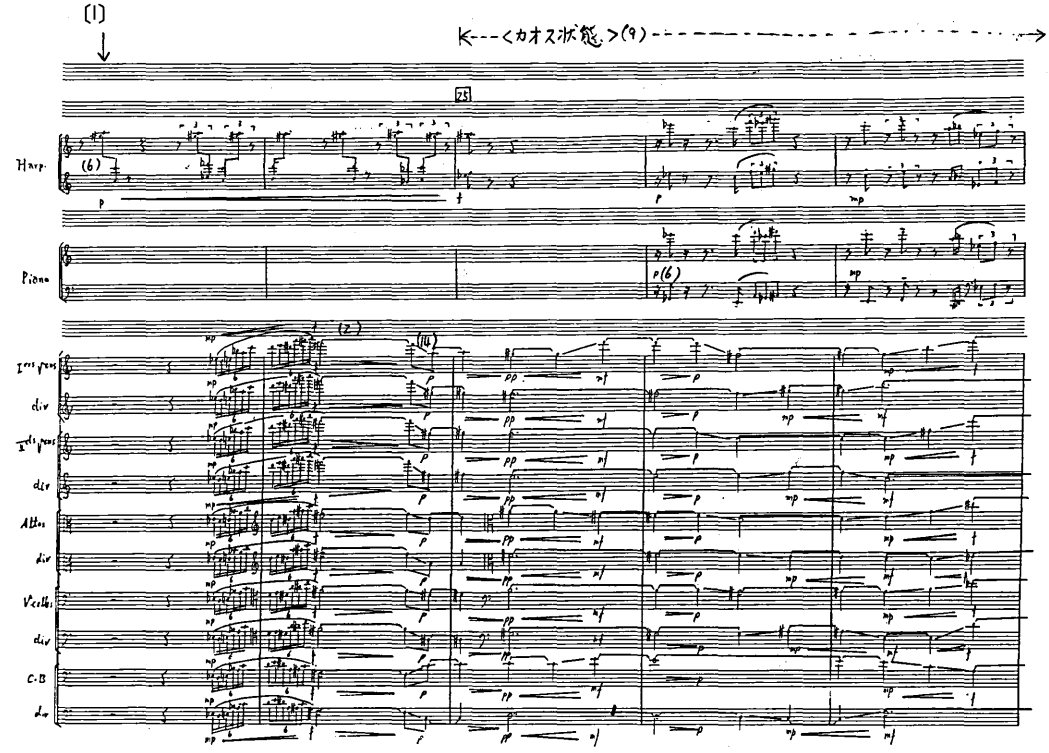


↑

（譜例 19）

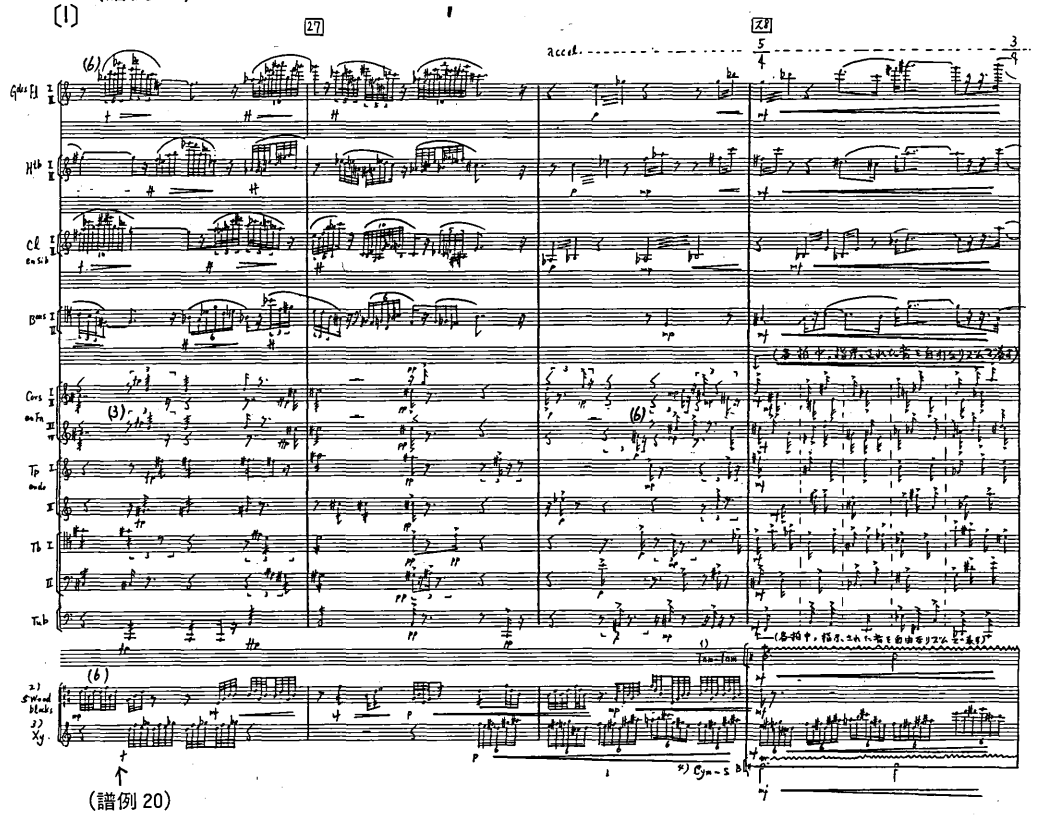
〔1〕

↓



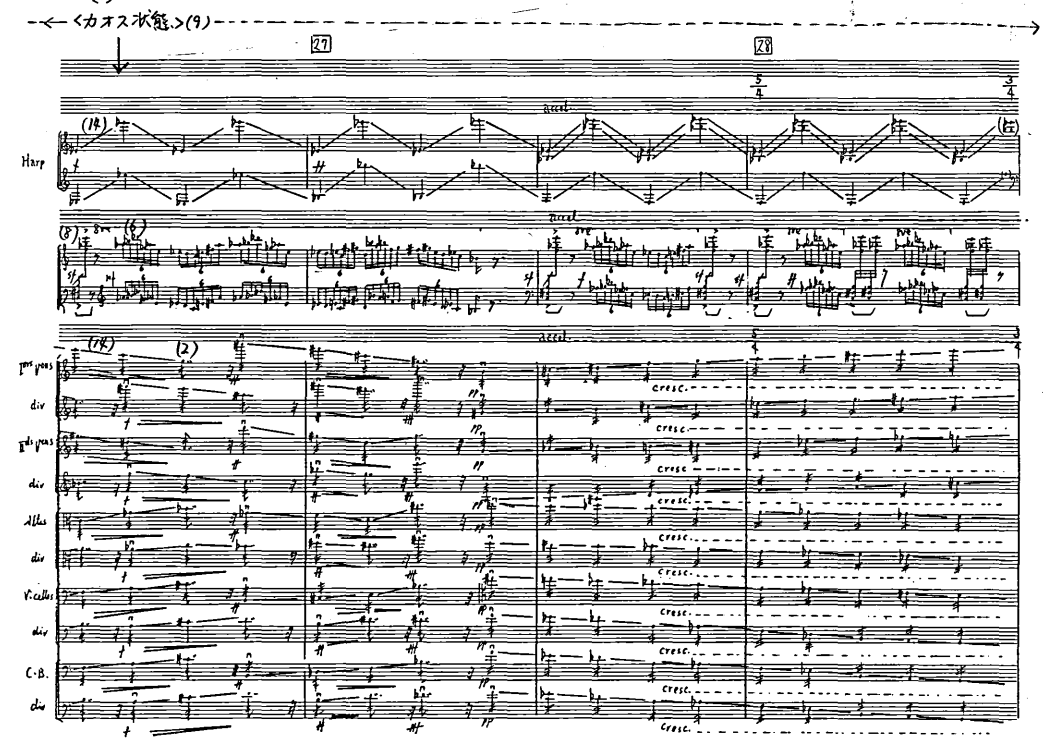
（譜例 20）

〔1〕

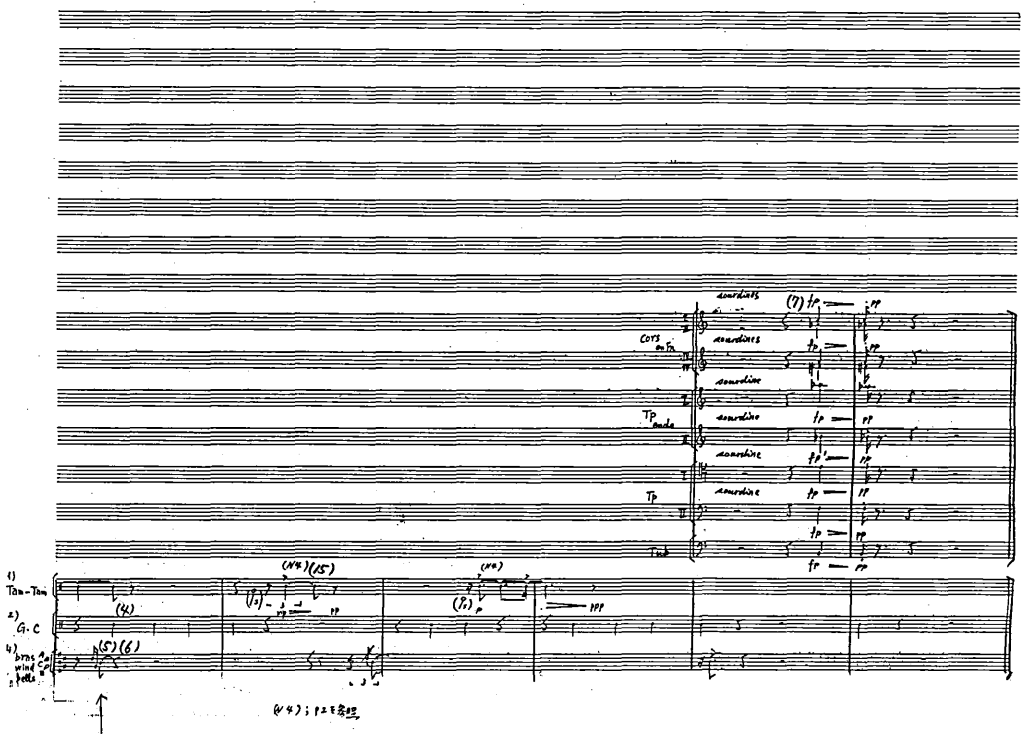

27
28
accel.
Cl
Tp
Tb
Tub
Tam-Tam
Xy.

（譜例 20）

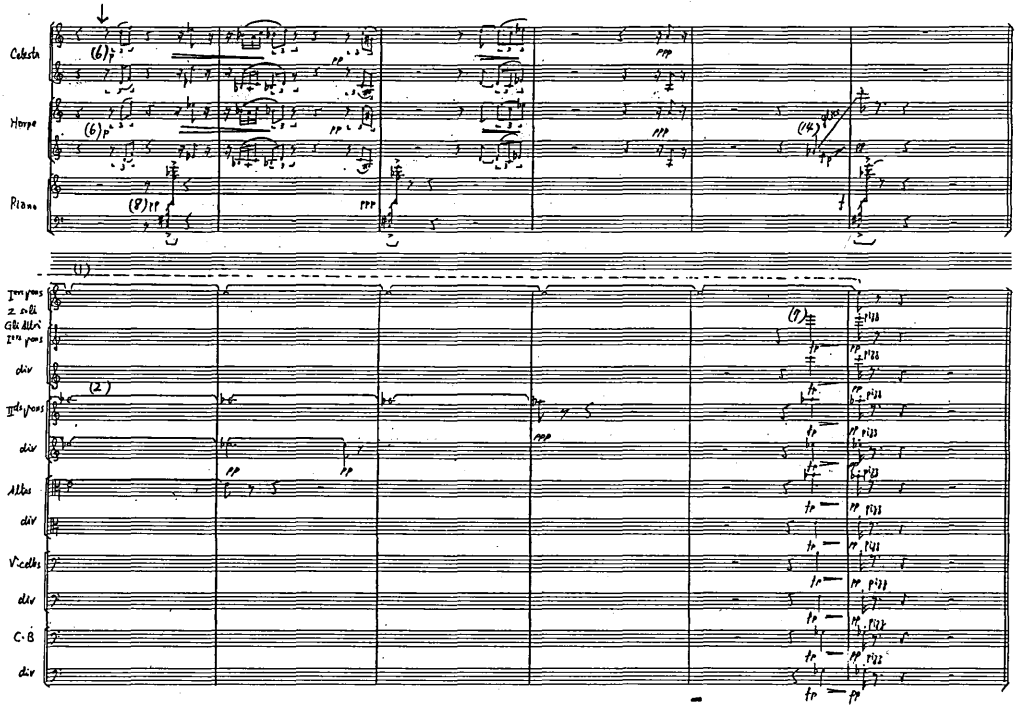
〔1〕


<カオス状態.>(9)
27
28
accel.
Harp
div
cresc.
C.B.

（譜例 21）
〔J〕


Cors en Fa
Tp
Tb
Tam-Tam
G.C
brass
wind
bells

（譜例 21）
〔J〕


Celesta
Harpe
Piano
Ier vons
Violes
Ier vons
div
IIds vons
div
Altos
div
V-cellos
div
C.B
div

〈注〉

(1)〈オーケストラ・プロジェクト〉は、わが国におけるオーケストラ作品の創造と発展のために、共通の目的をもって参加した作曲家のグループである。現在、約三十人の中堅作曲家により構成されている。一九七八年以来、これまで五回の公演が行なわれ、㈳日本作曲家協議会、日本交響楽振興財団、NHK、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団ほか、多くの公的機関により後援されてきた。

(2)〈オーケストラ・プロジェクト'87〉は、第五回目の公演であり、拙作のほか、北爪道夫作曲「SIDE BY SIDE」、中村滋延作曲「WINGS—打楽器群とオーケストラのための協奏的楽章—」、土居克行作曲「マリンバとオーケストラのための協奏曲」の三曲が初演された。

(3)拙作、「はてしのない風景、フルートとチェンバロのために」は、一九八五年十二月四日、「大代啓二、フルート・リサイタル」(於、東京・ルーテル市ケ谷センター)において、大代啓二、及川真理子により初演された。

(4)拙作、「はてしのない風景、クラリネットとピアノのために」は、一九八七年二月二十六日、「昭和六十一年度ひろしま文化祭、アンサンブル・コンサート—作曲家たちのメッセージ'87—」(於、広島・広島市東区民文化センター)において、武田忠善、伴谷真知子により初演された。

(5)松長有慶(監修)、杉浦康平、佐藤健共編『マンダラ=〔出現と消滅〕展(図録)』〈写真:加藤敬、構成:杉浦康平、図版解説:ツフテン・パルダン師、小林暢善)、西武美術館、一九八〇、全一五二頁、参照。

(6)加藤敬(写真)、松長有慶(解説)、杉浦康平(構成・造本)共著、『マンダラ—西チベットの仏教美術—』、毎日新聞社、一九八一、〔図像編〕:全二三九頁、〔解説編〕:全一八九頁、参照。

(7)「マンダラ=〔出現と消滅〕展」は、西チベットの仏教壁画を中心としたエクスポジションであり、一九八〇年十一月十九日から八月十二日の期間、西武美術館において、毎日新聞社と西武美術館の共同主催により開催された。

(8)木管楽器群や金管楽器群は、全体のバランスの上から各種属同数に楽器編成されることが一般的である。例えば、二管編成のオーケストラの場合、弦楽器群、打楽器群、鍵盤楽器群のほか、通常、木管楽器群は、フルート(第二フルートがピッコロに持ち換えることも、またフルート二本のほかにピッコロ一本が加えられることもある)、オーボエ、クラリネット、ファゴット各二本、金管楽器群は、ホルン四本、トランペット二本、テノール・トロンボーン二本、バス・トロンボーンまたはテューバ一本となることが多い。

(9)キン(きんす=磬、かね=磬)は、銅や青銅で造られた直径二〇〜六〇cm位いのわん形の仏具。

(10)カウベルは、アルプスなどの山岳地帯に遊牧する、牛が首につけているベルを楽器として改良したもの。

(11)本文中の（　）の中の数字は、〔図2～4〕の第3段階のスケッチ、及び、（譜例9～21）の楽譜中のものと一致している。
(12)パルスは、アクセントを持たない規則的なリズムを示す。
(13)ボンゴは、大小二個の小型の片面の太鼓をつなぎ合わせたものを示す。
(14)トムトムは、テナー・ドラム（中太鼓）に類似した、片面に皮をはった円筒形の太鼓を示す。
(15)この作品におけるカデンツァは、ソロによる即興的な楽句を示す。
(16)微分音程は、半音よりも狭い音程を示す。
(17)グリッサンドは、高さの異なる二音間を、アクセントをつけないで連続的に滑るように奏する。
(18)タムタムは、銅や錫などの合金でつくられた、三〇～一一〇cm位いの皿状の大きな円盤を示す。
(19)スレーベルは、皮ひも、板、棒に直径二～三cmの鈴を十数個取り付けたものを示す。
(20)サスペンディド・シンバルは、つるして演奏するシンバルを示す。
(21)ウッド・ブロックは、硬質の木をくりぬいて、音響のために割れ目をつけたものを示す。
(22)ポルタメントは、高さの異なる音へなめらかに移行することを示す。
(23)ピッチカートは、弦を指ではじくことを示す。

（ともたに・こうじ　エリザベト音楽大学）